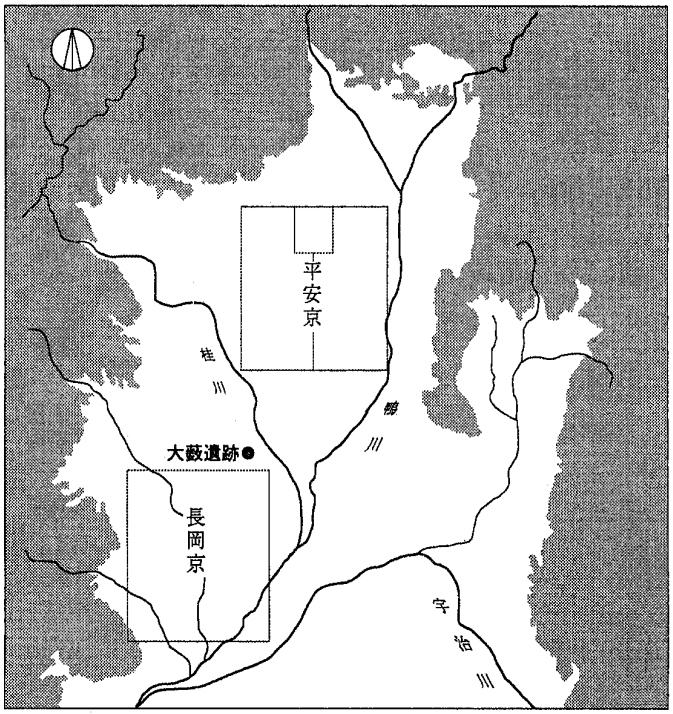
大薮遺跡発掘調査現地説明会資料



1998年９月12日

財団法人京都市埋蔵文化財研究所

大薮遺跡発掘調査現地説明会資料

場　　所　　京都市南区久世殿城町
期　　間　　1998年７月１日～継続中
調査面積　　約1,400㎡
調査主体　　（財）京都市埋蔵文化財研究所

１、調査の経過

今回の調査は、街路建設工事（向日町上鳥羽線）に伴う発掘調査です。今年度は国道171号線から東へ約230m付近にある水路までが調査予定になっています（図１）。昨年末には前もって道路の側溝部分を調査し、現在は調査予定地の東側に調査区を設定して調査を進めています。今後、順次西側へ調査を進めていく予定です。

２、調査地周辺の歴史

今回の調査現場のある殿城町一帯は、中久世遺跡とその南東に広がる大薮遺跡の範囲に含まれます（図２）。共に縄文時代から室町時代に至る複合遺跡です。付近一帯は海抜15～16mの平坦な地形で桂川の後背湿地になっており、現在でこそ人家や工場が増えましたが、近年までは多くの水田が営まれていました。

弥生時代には現在の久世中学校付近から南に大きな河川が流れていたと考えられています。この河川の東岸にあたる大薮町内では弥生時代後期の大型竪穴住居址がみつかっており、集落が営まれていたと推測されています。

奈良時代にもこの河川は存在し、久世中学校構内では護岸に用いられた大量の杭がみつかっています。

鎌倉時代から室町時代、殿城町一帯は東寺などが支配した下久世庄に属していました。この時期の遺構（掘立柱建物や井戸・溝など）が周辺の調査で確認されています。久世中学校構内でみつかった河川はこの時期まで機能しており、近世（江戸時代）には埋没して水田になったようです。調査区の東側の水田が周りと比べて一段低いのはこの名残（なごり）です。

３、調査の状況

今回の調査では弥生時代後期と、室町時代の遺構が同じ面でみつかりました。

弥生時代後期の遺構（図３・５）

弥生時代後期の主な遺構としては、調査区のほぼ中央に北から南西方向へ湾曲しながら延びる溝１があります。溝１の西側には隅丸方形の大型竪穴住居２と円形の竪穴住居３があります。また東側には方形周溝墓（ほうけいしゅうこうぼ）４があります。竪穴住居のある部分が集落とすると、溝１は集落の周りを囲んでいる環濠と考えることができます。その東側は方形周

溝墓があることから、墓域と考えられます。

遺物は比較的少なく、住居址や溝、方形周溝墓から弥生後期の土器（壺・甕・高杯）、木製品（鋤）などが出土しています。

今回発見した竪穴住居２は南半分の確認に留まりましたが、隅丸方形で、一辺の長さが約11m、床面積約120㎡と推定できます。床には主柱根が２ヶ所残存しており、その直径は約30cmを越えます。住居内の周溝には埋め込まれた板材の一部が残存しており、壁面の崩れを防ぐために板を当てていた状況がわかりました。またその内側に側柱が並んでいることもわかりました。南東辺のほぼ中央には壁際に土壙があり、その土壙からは溝５が住居の外側に延びています。溝の底には丸太を半裁にして内側を刳り貫いた幅30cm、長さ約４mの木樋が埋め込まれており、溝は暗渠であることがわかりました。

室町時代の遺構（図４）

室町時代の主な遺構としては調査区の東側を東西に走る堀６があります。この堀は調査区の中央で南側に折れ曲がり調査区外へ延びて行きます。また、調査区の西部には南側に東西方向の堀７があり、これは調査区中央で北側に折れ曲がり、調査区北部でとぎれます。この堀６と７の間は幅６m程度の通路となっており、その中央に礎石建物８があります。堀７に囲まれた調査区の北西部には、柱穴や礎石が多くあり、復元できませんでしたが数棟の建物があったことがわかります。また、調査区の東部、堀６の北側にも掘立柱建物や井戸などが整然と並んでいます。

こうした状況から堀６は外堀、堀７は内堀、その間にある建物８は門と推測でき、居館の一部にあたるものと考えられます。

遺物は土器類（土師器・瓦器・焼締陶器・青磁・白磁など）、木製品（曲物）、漆器（椀）、銭貨などが出土しています。

４、まとめ

今回の調査の成果は、弥生時代後期の集落跡が墓域と共にみつかったこと、室町時代の居館の一部がみつかったことがあげられます。

特に、弥生時代の竪穴住居２は一辺11mを越える大型のもので、周溝内に土留めの板材や杭の一部が残るなど、当時の竪穴住居の構造を知るために良好な資料を提供してくれました。この住居は、大型で周囲に側柱があることや住居内の土壙から暗渠の排水溝が延びるなど、一般の住居とはやや異なる規模と構造をしています。したがって、ムラの中の集会所や共同作業場といった性格のものを想定していますが、定かではありません。

室町時代の居館については、周囲に堀を巡らせていることから軍事的な色彩をおびている可能性が考えられます。現殿城町には、中世（鎌倉～室町時代）に下久世城と呼ばれる城柵があったと推測されていますが、あるいはこれに関連するものかも知れません。

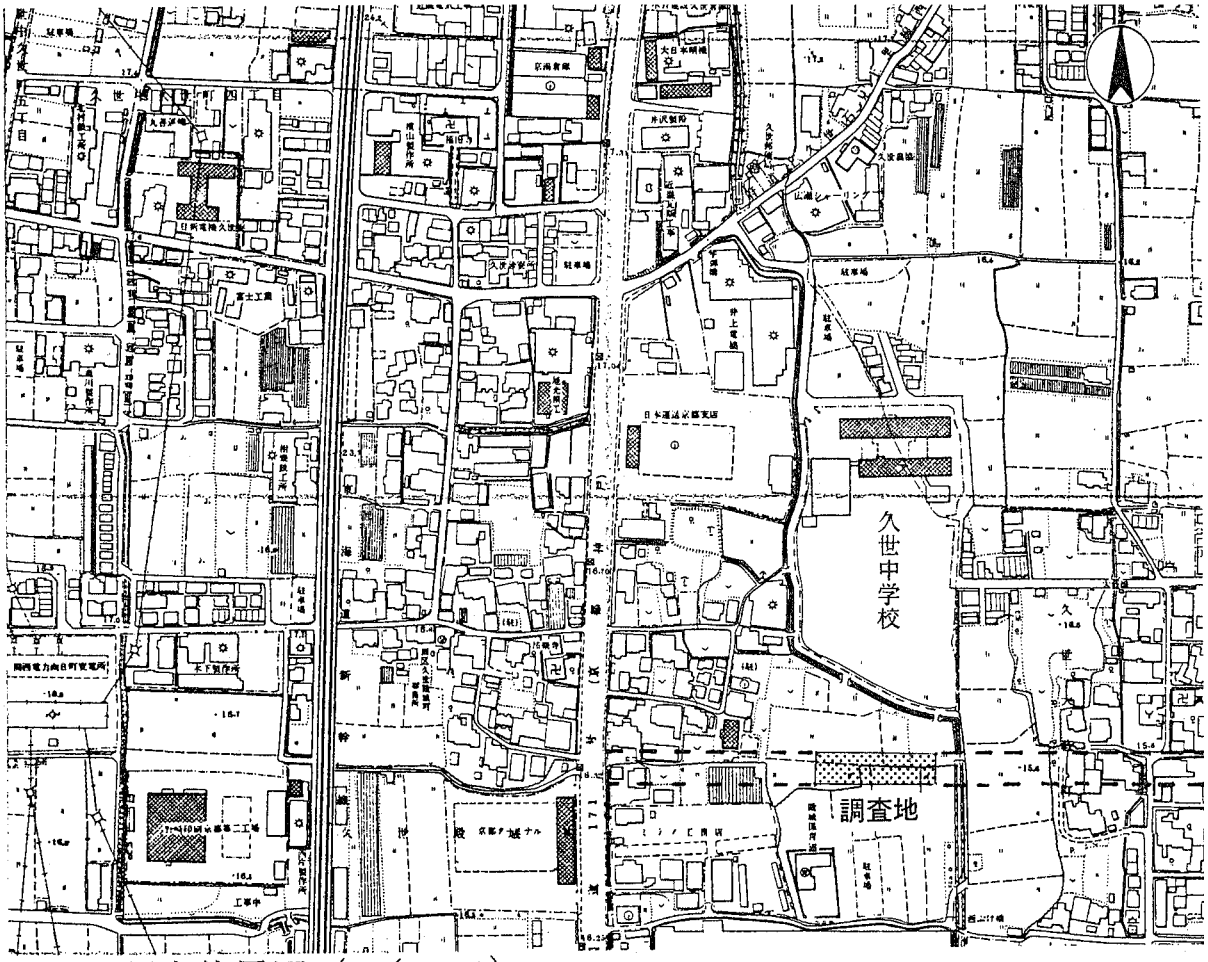


図１　調査位置図（1／5,000）

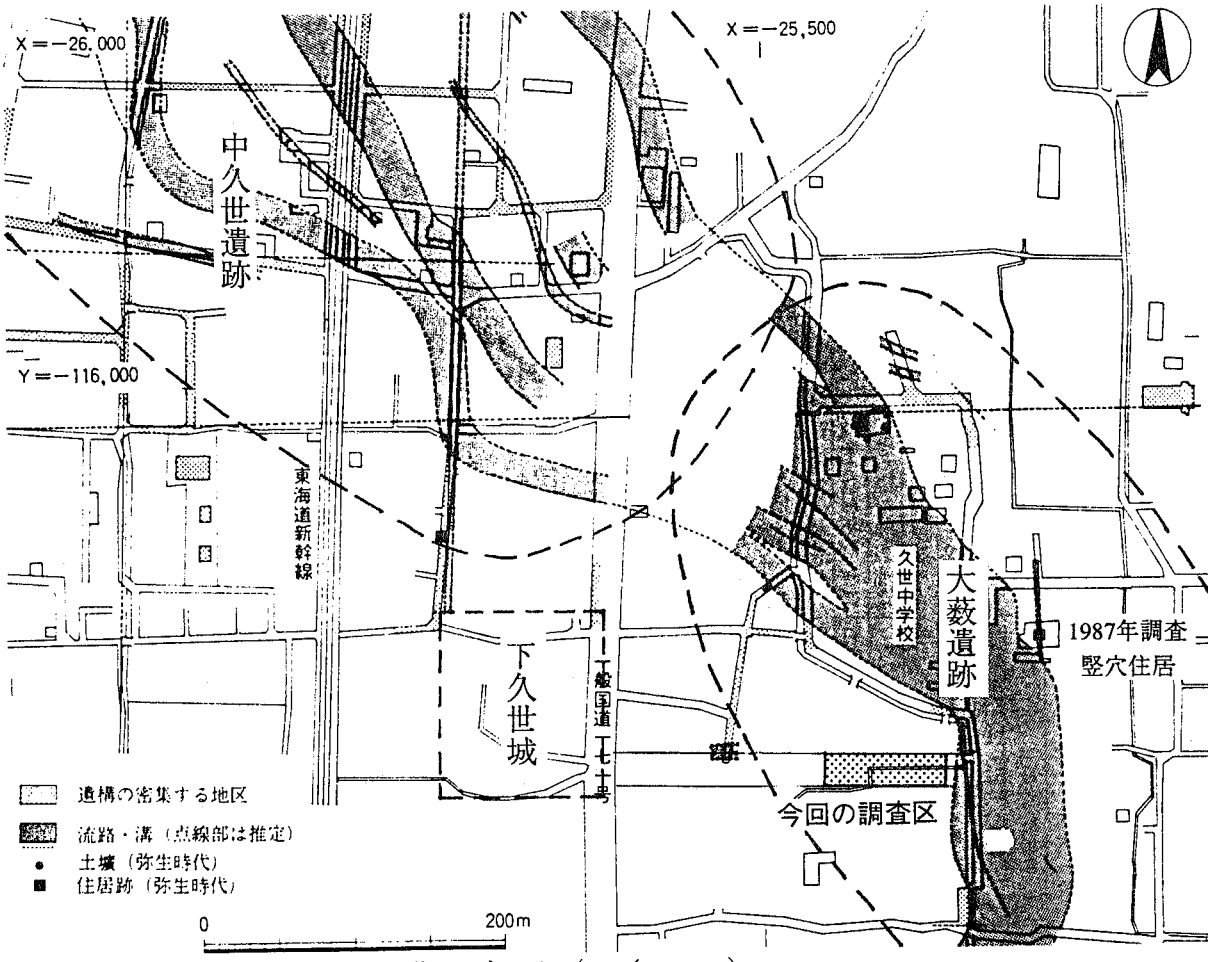


図２　調査地周辺の遺構分布図（1／5,000）

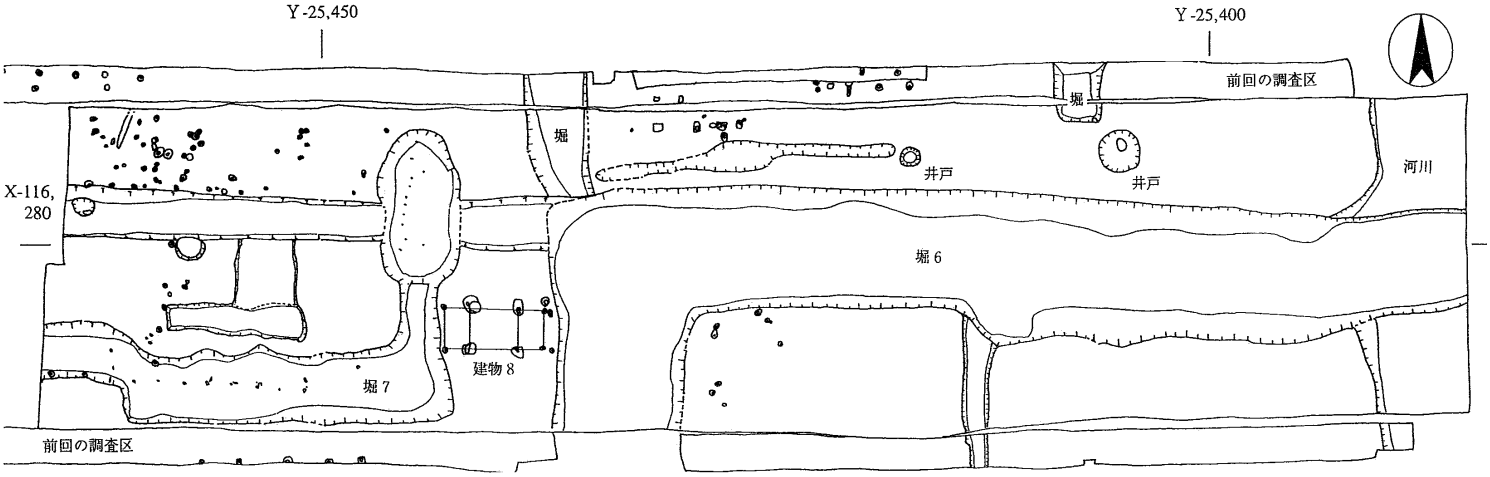


図4　調査区平面図（1／300、室町時代）

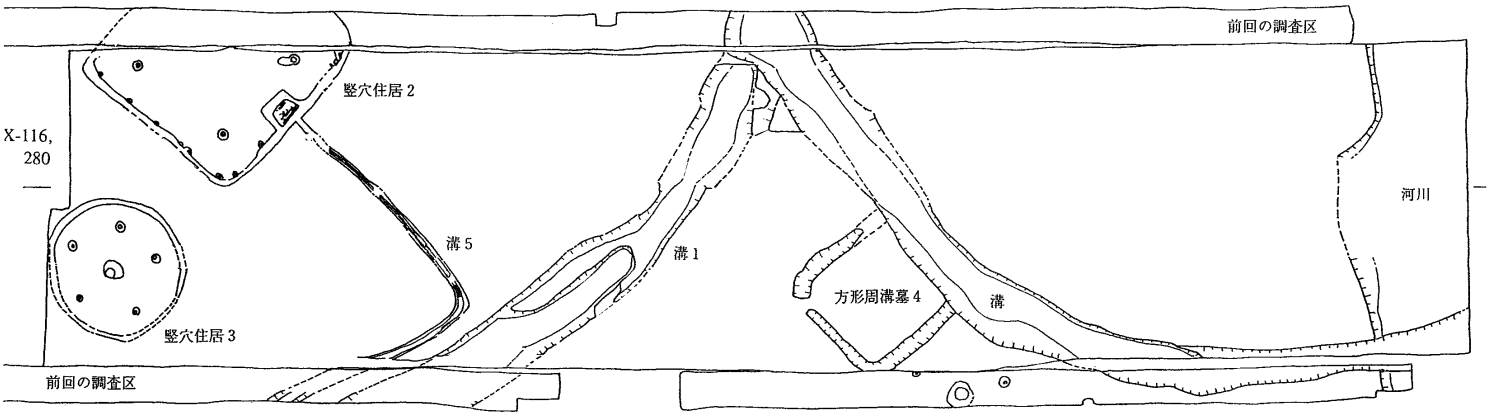


図3　調査区平面図（1／300、弥生時代後期）

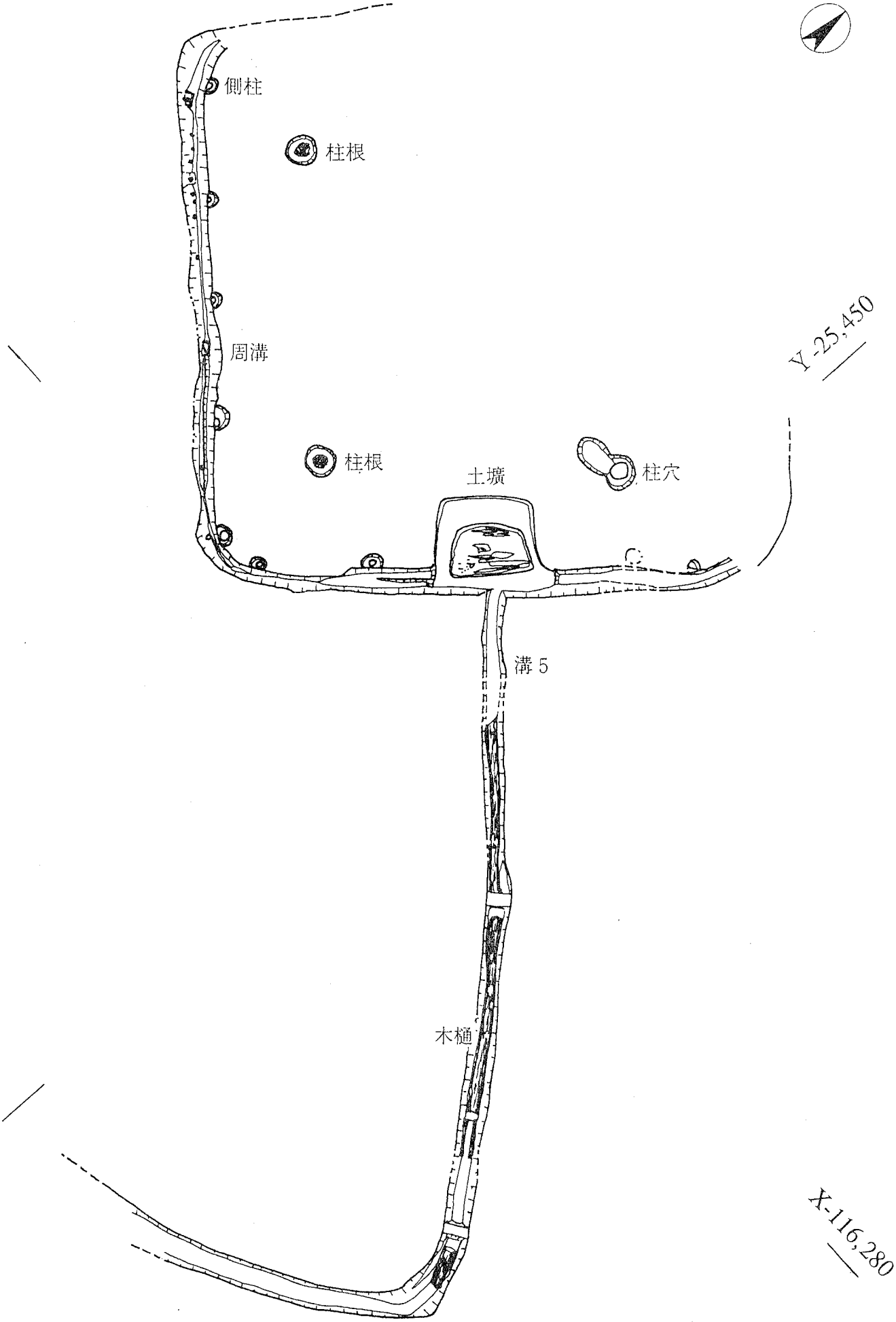
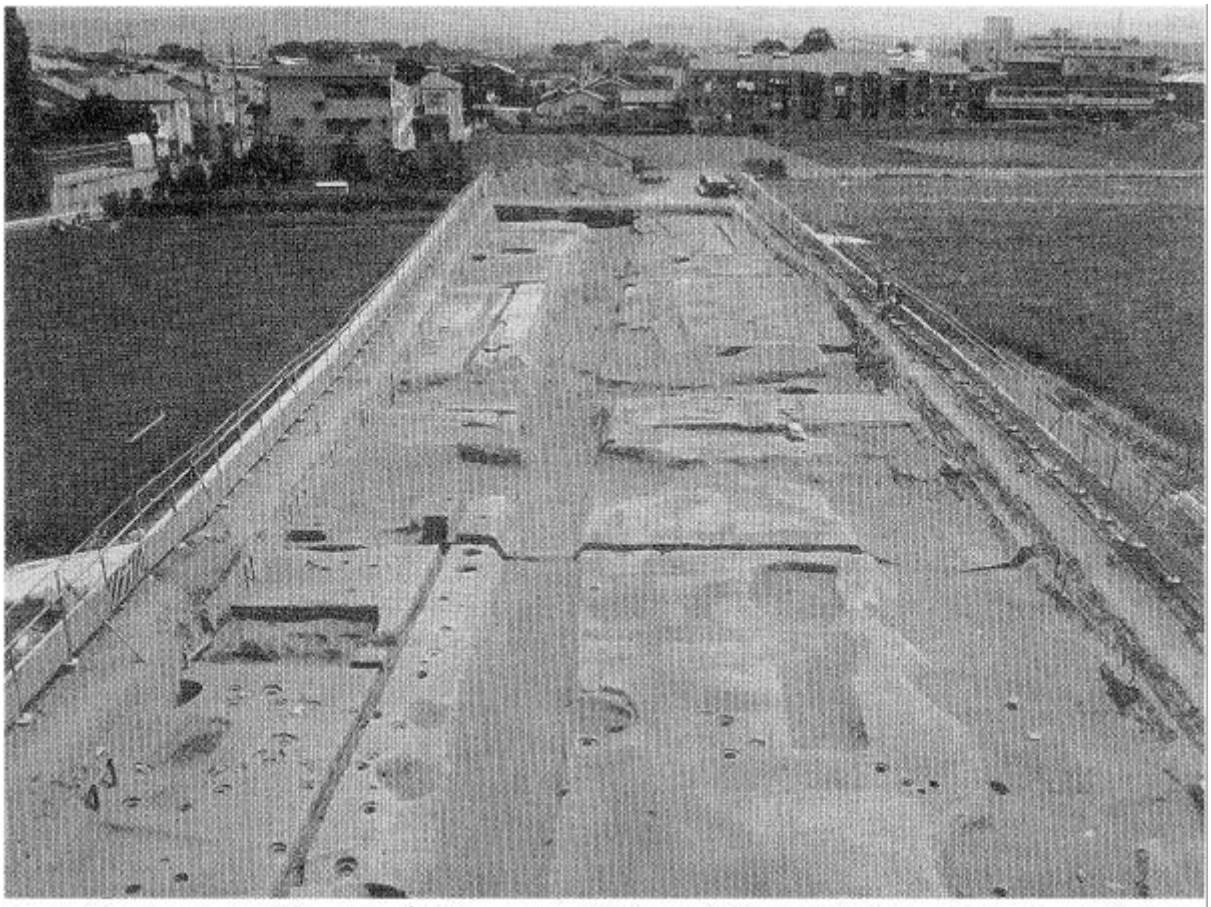
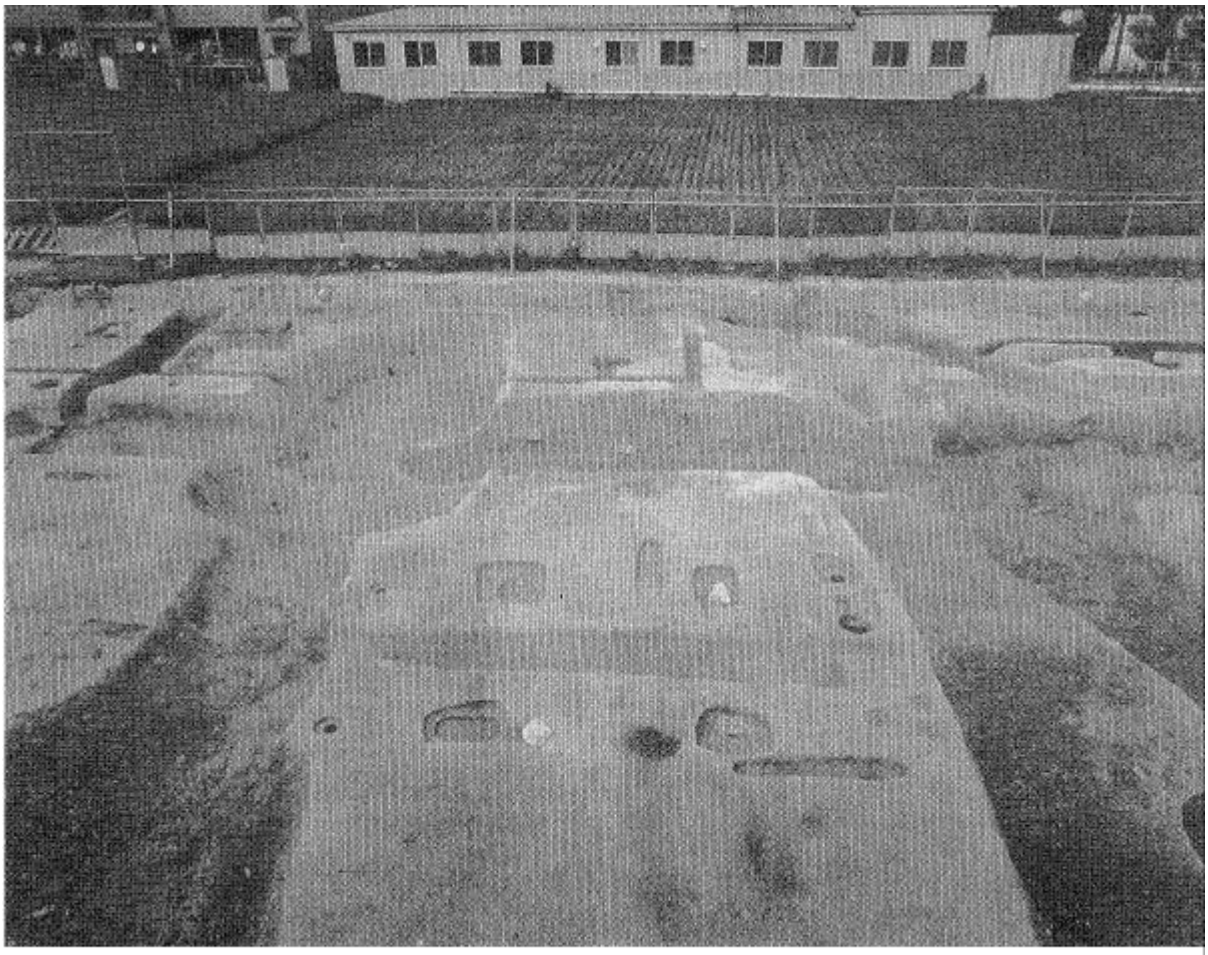


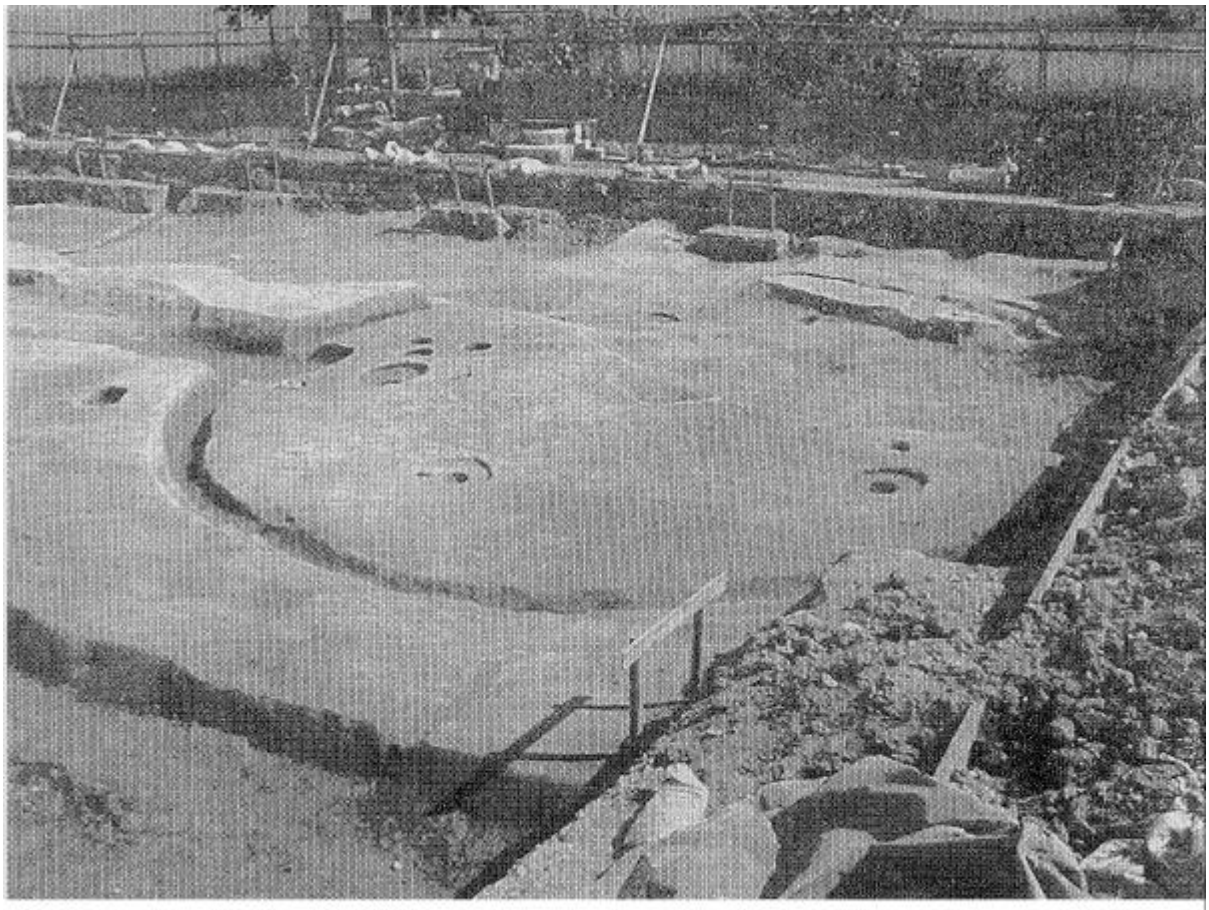
図５　竪穴住居２平面図（１／100）



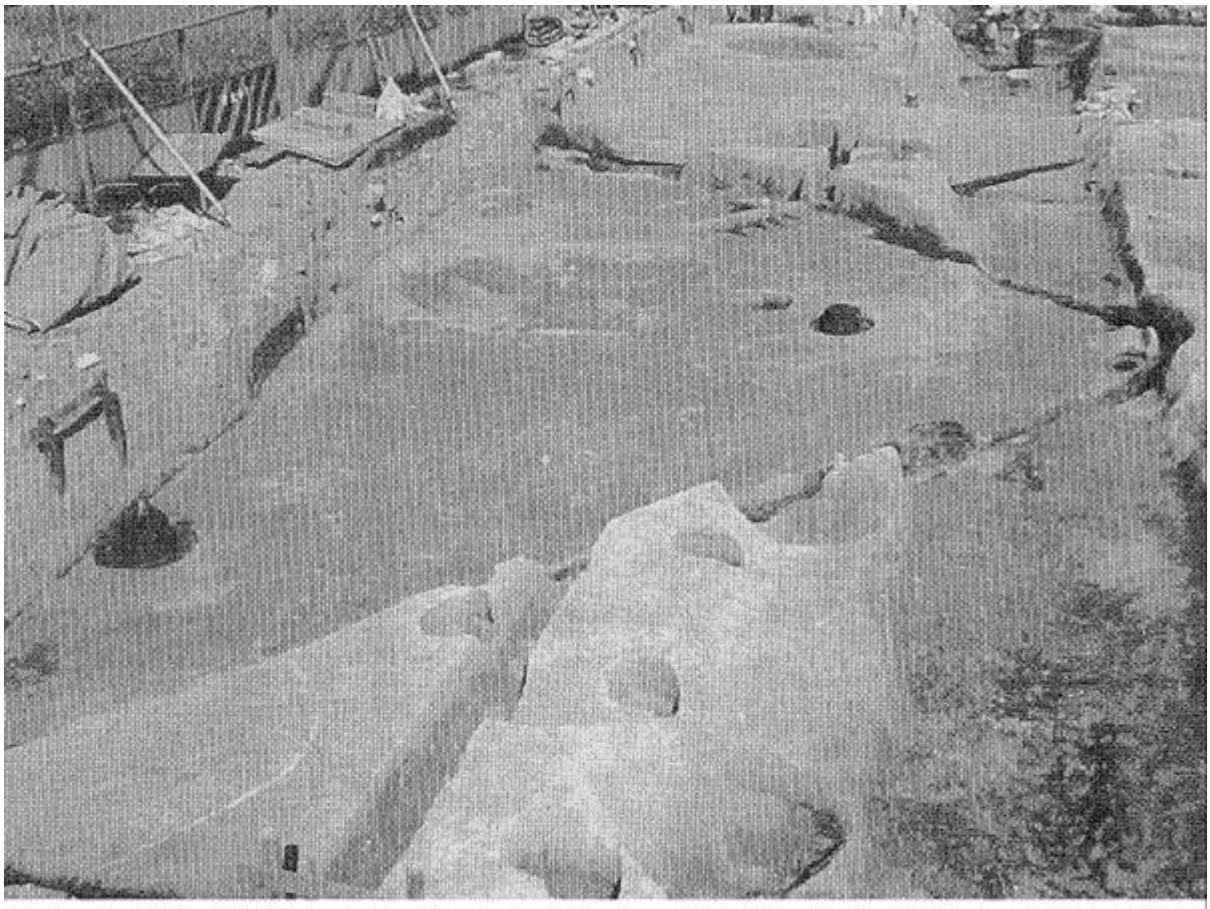
室町時代全景（西から）



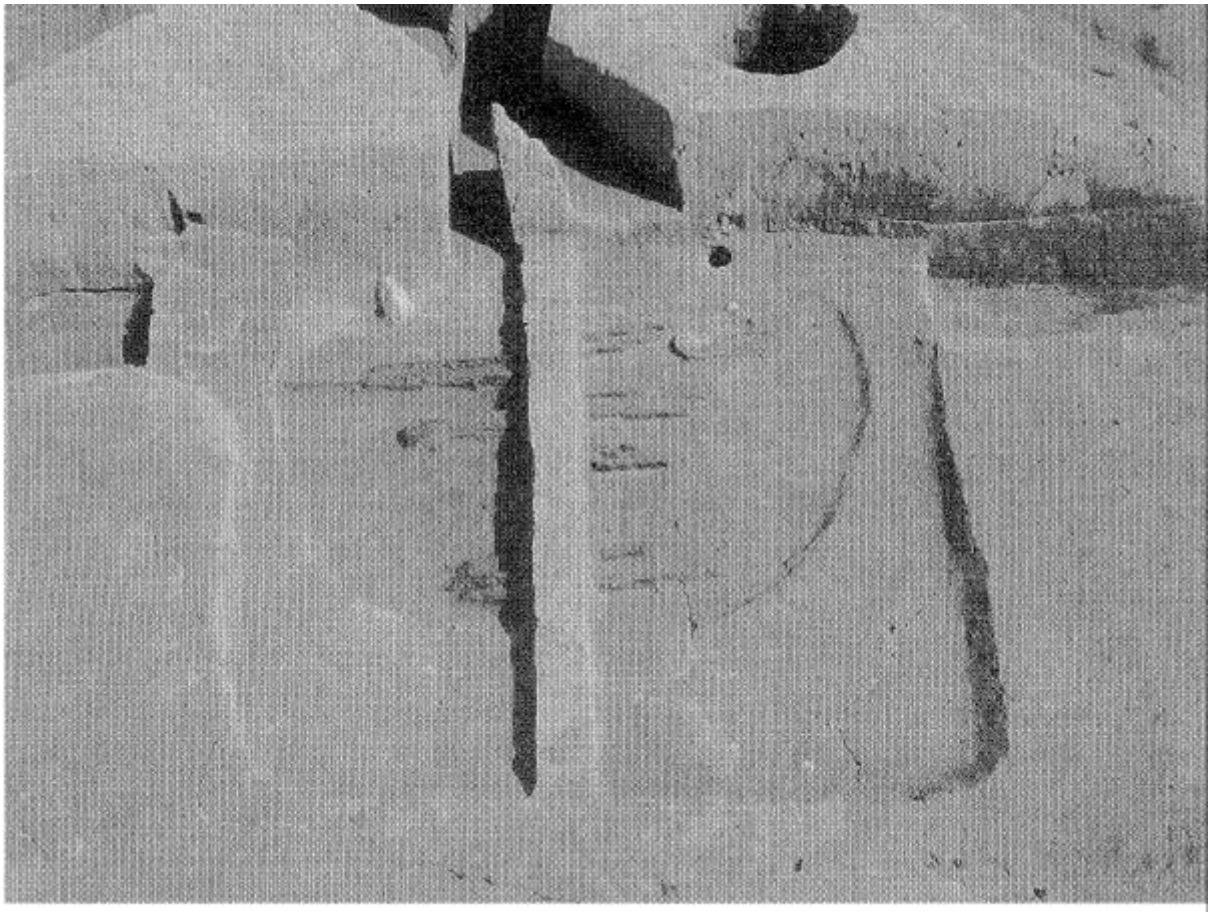
礎石建物８（南から）



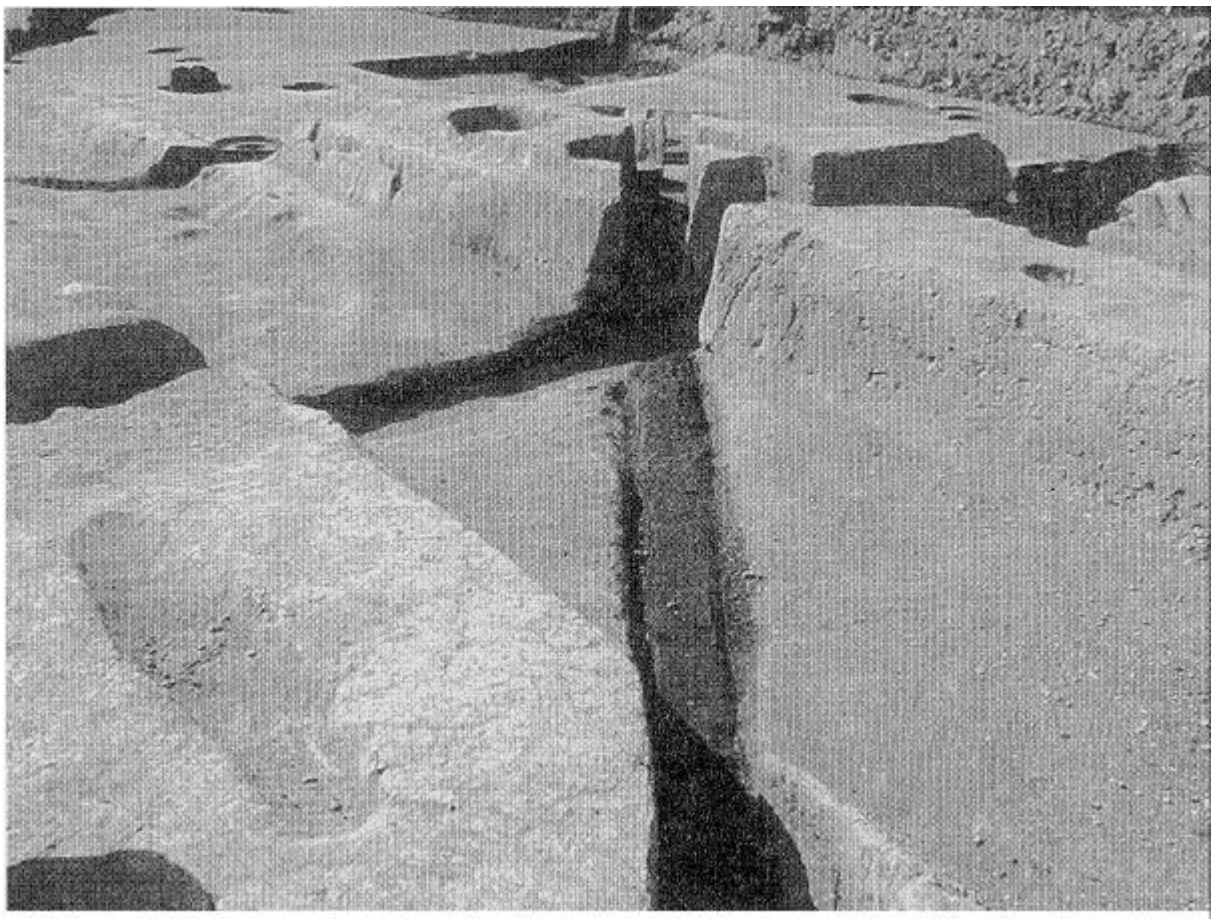
竪穴住居３（北西から）



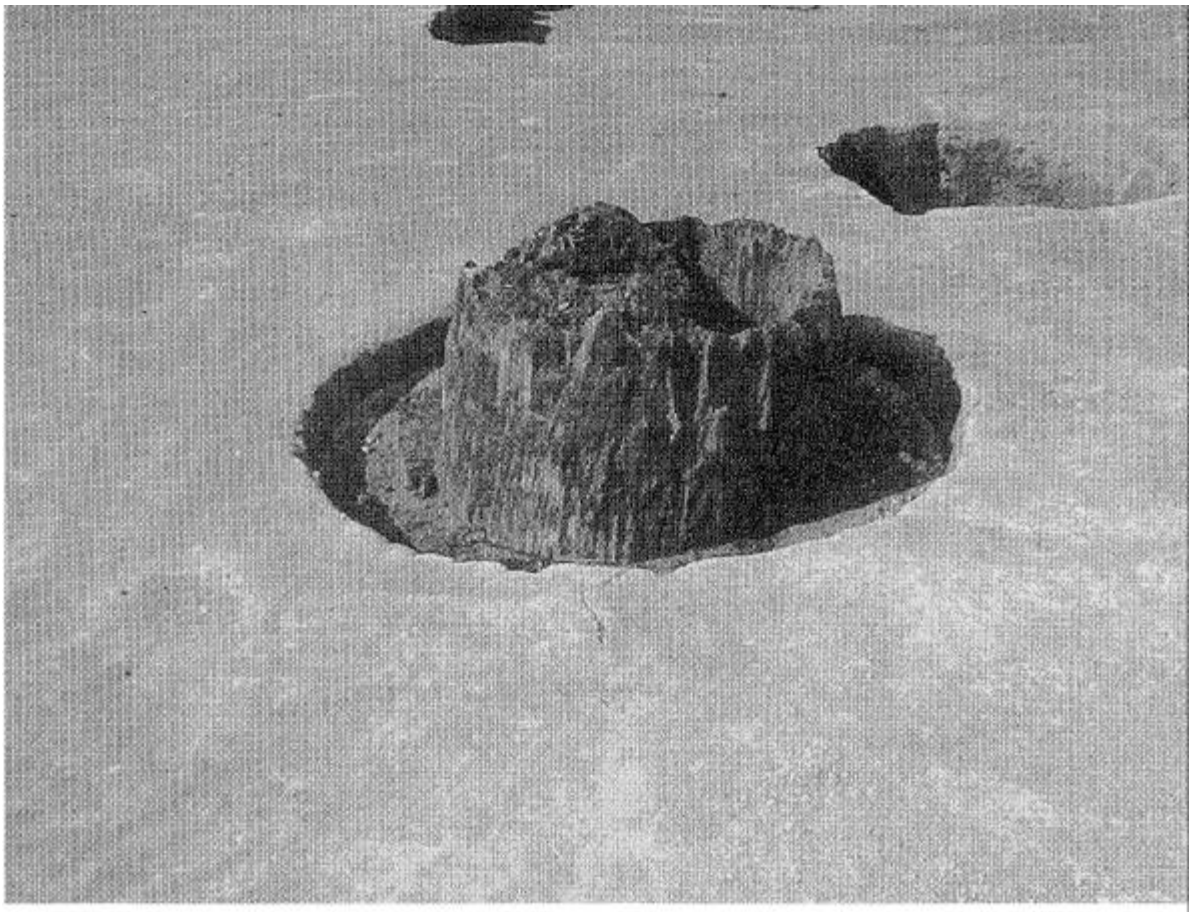
竪穴住居２（南西から）



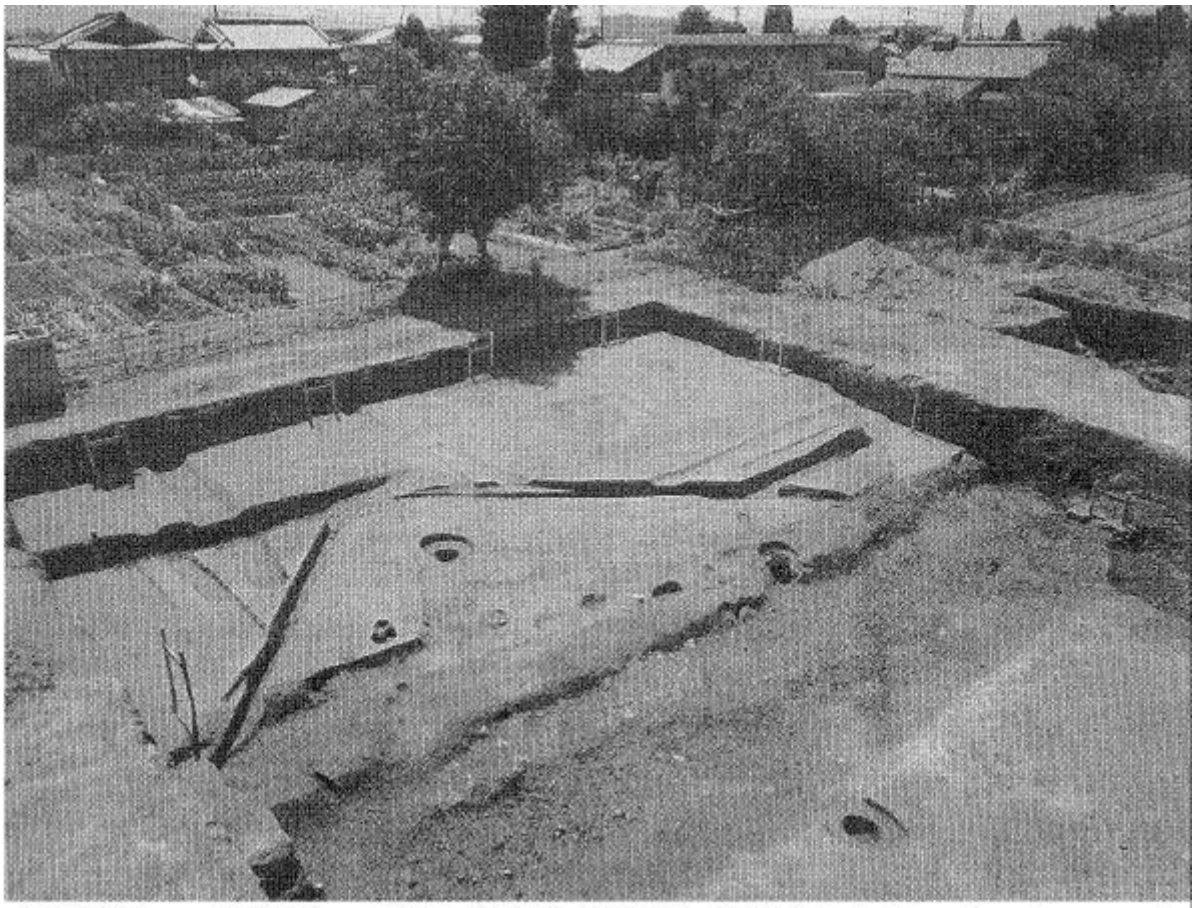
竪穴住居２南東辺中央の土壙（北西から）



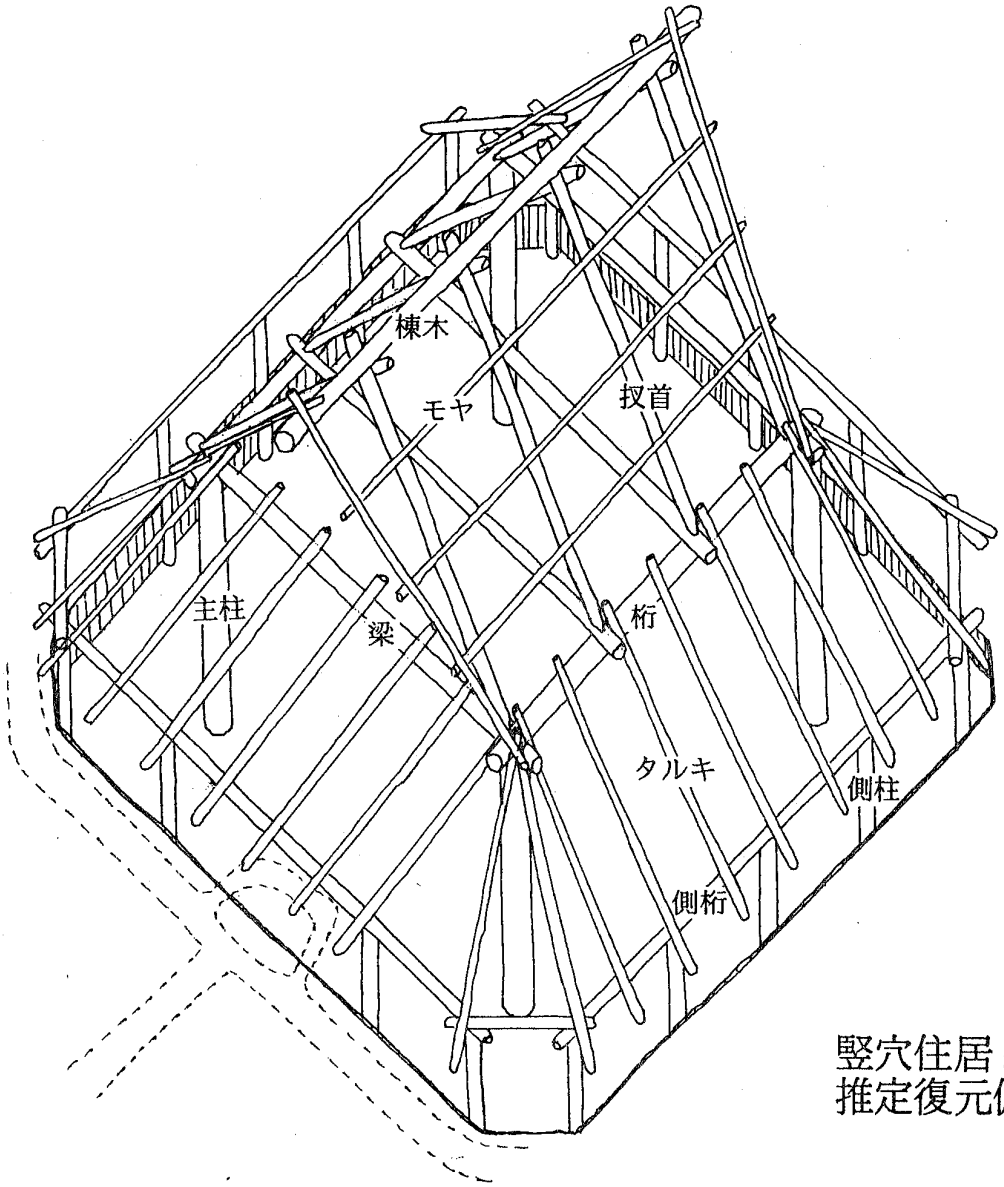
溝５（南東から）



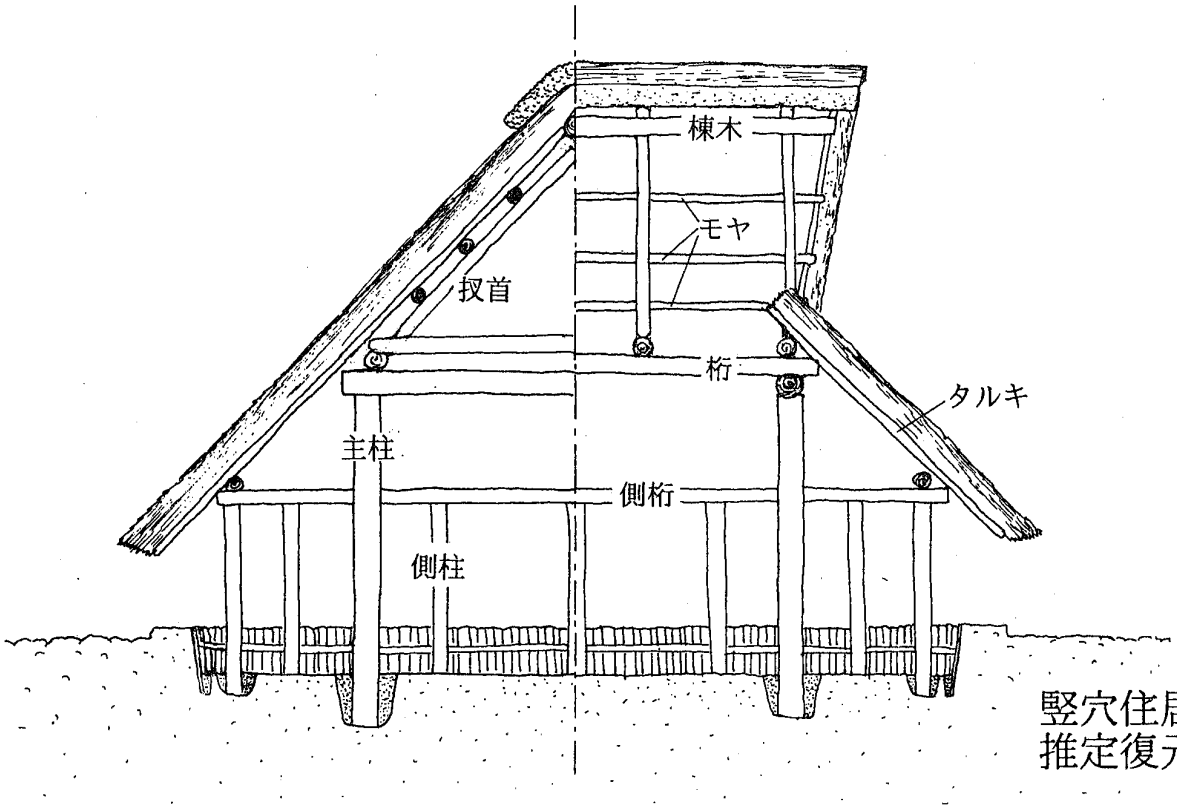
竪穴住居２主柱根（南から）



参考資料　一辺約10mの竪穴住居址（1987年大薮遺跡発掘調査　北西から）



竪穴住居２
推定復元俯瞰図



竪穴住居２
推定復元断面図